

あのとときこのとき

寄稿

あのとときこのとき 140-①

感動家・元・教師

ゲストハウス繭子の宿オーナー

西塚繭子（青森県三戸郡出身）

●生まれた時から民謡・南部手踊りとともに

1971年5月、南部町。父津軽三味線、母南部手踊りの家元に長女として生まれる。生まれた子どもには民謡をさせよ、どうやら私の人生は最初から民謡だったのだ。3年後妹の淳子が生まれる。

三味線奏者の父にとって、娘たちが民謡を唄って、太鼓を叩いて、母が踊る。一家で舞台に立てるというスタンスだった。



●とにかく嫌でたまらない

気付いたら民謡を唄っていた。学校から帰ると厳しい父の稽古が待っていた。毎日2時間。その苦行の中、妹は私よりずっと先に才能を開花させる。民謡の大会に出れば、妹はチャンピオン、私は「天気良かったで賞」。青空の眩しさが今でも頭に残っている。久保正幸師匠宅での稽古も酷だった。いつか辞めてやると心はそれでいっばいだった。

中学生になっても芽が出ず、思い切って「勉強に集中したいから辞めたい。」と言ってみた。すると、父は意外にも「へだら休め」と。

それまでの反動で私は友達と遊んで楽しいだけの人生に切り替わった。引き換えに、重い期待を一心に受けたのは言うまでもなく妹の淳子であった。淳子は小学校最後の運動会の途中であっても、舞台のために、否応なしに引つ張られて行った。

●父への初めての反抗 自分の道を決めた瞬間

私の進路は父により決められていた。「高齢社会が来るんだから、食いつばぐれのない「看護師」になるんだせ。」私は自分のなりたいたいのも分からないまま、高校では看護学校に受かるための授業を受け

ていた。しかし、生物の授業ではミトコンドリア、リボゾームの図が気持ち悪くて見られない。私に看護師は向かない。

当時、私は親戚の家に下宿していた。「繭子お姉ちゃん、運動会応援に来て」その小学生兄弟に誘われ、私は運動会の歓声の中に赴いた。徒競走の応援の中、目の前でその小学生が転んだ。あつという間にみんなに抜かれてビリけつ。どうする！？その子はたち上ると、ゴールを目指して全力で走って行った。

その瞬間、私の頬には滝のように涙が流れた。「今の私はどうだ・・・小学校時代は輝いていたのに・・・」キラキラしていた頃の思い出が脳裏を駆け巡った。放課後の活動、先生たちも一生懸命に関わってくれたこと。まばゆい光に包まれた記憶を胸に私は悔しさでいっばいだった。

限界を決めずに何事にもチャレンジしていた小学生の自分。それに対し、高校生の私はどうだ？帰宅部だし、他校の野球部の追っかけて、野球グラウンドの金網にかぶりついてるだけの高校生活。

「そうだ！希望でキラキラした子どもたちがいる小学校の先生になろう!!」

もう進路の決定に迷いはなかった。初めて自分で見つけた夢。時

は既に高校3年生の夏。

父の猛反対を押し切り、大学へ進学。私は希望に満ち溢れていた。そして私は最初の夢を叶え、小学校の先生になった。



●小学校の熱血教師として

母校への赴任から始まり、八戸市と三戸郡の小学校に勤務した。和太鼓部では子どもたちのパワーもさることながら、私のパワーは凄まじいものがあつた。（自分で言う？）私のやりがいは、子どもたちの「表現力」を最大限に引き出すこと。発表会や演奏会ではとにかくその時の自分自身を最大限に表現させること。我ながら適任だったと思う。

●土日は福祉施設で民謡・民舞踊を披露

私が初めて教壇に立った年、週休2日制が導入され、学校外活動を通して子どもたちの情緒を育んでいくかと、ニュースで議論されていた。

私が教員としてできることはただひとつ。「郷土に伝わる芸能、民謡や踊りや太鼓を子どもたちと一緒に楽しむこと」。学習発表会において、このことが子どもや保護者、地域には新鮮だったようだ。子どもたちからの強い希望もあり、学校外活動として、南部手踊り、民謡、三味線を主体にしたチーム「芸の企画24の瞳」を立ち上げた。週休2日を利用して老人ホームなどの福祉施設を訪問し、芸能を通して世代間交流をした。

福祉施設訪問はこの30年間で、のべ200軒以上になった。福祉活動が称えられ、全国ボランティア賞を受賞し、海部元総理大臣から表彰されたり、フィリピンのタクロン大学では4000人の観衆の前で子どもたちが日頃の稽古の成果を披露した。四年生が民謡第一声を放った瞬間、大きな歓声が沸き起り、スタンディングオベーション！

その後の子どもたちは民謡や踊りの全国大会にエントリーし、3年連続でジュニア部門で優勝をする等、大活躍であった。

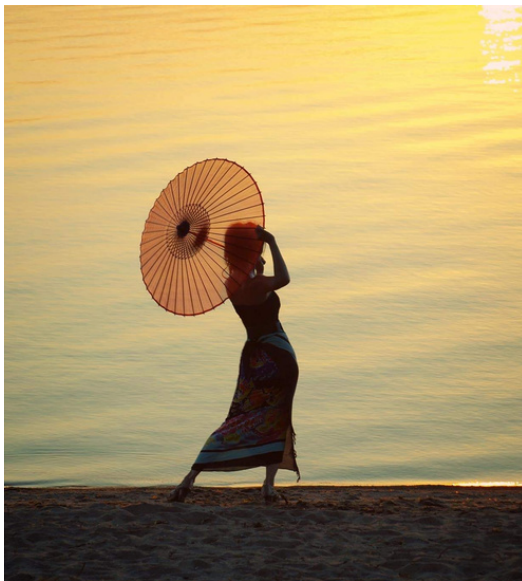
●突然の転機 一転無職へ

教員として26年という年月が経った2019年、新型コロナウイルスの影響で全国一斉に休校となり、教育界は一転する。ちょうどこの頃、ある出来事がきっかけで私は「これ以上教育界ではやっていけない」と教育人生に幕をおろす決断をした。49歳だった。

●さてこの先どうする？

先のことなど一切考えてはいなかったが50歳まであと半年ある。この半年間は自己投資期間と決めた。「そうだ！おら東京さいぐだ！」見たことない東京へ月に一度1週間ほど短期滞在を繰り返すこと半年。

そんな中、毎日地道に継続していたものがSNS。「このくびれボディならバズると思います」と、東京の知り合いに薦められ、TikTokを始めたのだ。すぐ実行するのが私のいいところ。毎日投稿、毎日ライブ配信を半年間続けたらみるみるフォロワーも増えたのである。



●ゲストハウス「蘭子の宿」を始める

フォロワーが3万人になった頃、私は事故による大怪我をした。骨折3か所で身動きが取れない。

私に残っているものは家と芸と笑顔…。ライブ配信中、この状況をリスナーさんと話していると、「家があるなら、ゲストハウスやってみては？」と、宮崎県のゲストハウスのオーナーさんから提案を受けた。なんと三日後にはその方が駆けつけてくださり、車いすの私を押しながら民宿開業に必要な法的手続きを数日で済ませてくれた。あとは、オープンさせるだけ。

西塚蘭子

26年間小学校教師 コロナ禍で突然退職 南部町で『蘭子の宿』を経営。
民謡、南部手踊り、津軽三味線教室。福祉施設訪問、各イベントに出演。
月に一度は東京で妹と民謡、手踊り日本一が伝わる体験会を実施。

人は誰でも今から輝ける。

感動スルヒトデ、ワタシハアリタイ
芸能の継承と発展に力注ぐ

主な受賞歴

2001青森県手踊り名人位

2002南部七踊り全国大会優勝

2008青森県民謡民舞全国大会優勝

2024青森県民謡王座 他

女性史上初の二冠



しかし時はコロナ禍。街にも人がいない状況であったが、「泊まってみよう」と言ってくれるリスナーさんからの後押しを受け、2021年12月25日「蘭子の宿」オープン。
私の心は新しい世界に向かう希望と期待で晴々していた。

(続く)

あのとときこのとき

寄稿

あのとときこのとき 140-②

感動家・元・教師

ゲストハウス繭子の宿オーナー

西塚繭子（青森県三戸郡出身）

●民謡・民謡舞の魅力への気付き

すると、全国各地からいろいろな方が集まってくるではないか。元校長先生やフリースクールの校長先生、スタッフさん、不登校の子供と保護者、…多くの方々がやってきて、身の上話をした。ステイホームが長く、憩いの場所を求めているのかな。女将として勉強させていただくこと、気付きも多くあった。新型コロナウイルスの流行が落ち着くと、海外からのお客様が繭子の宿に訪れるようになった。

インバウンド向けに何か工夫したわけでもないが、気付けば外国からのお客様が半分を超えていた。ある日、お客様が宿にあったトロフィーを見て言った。「民謡とか踊りって書いてあります、聴いてみたいです」それまで民謡とは、「稽古して舞台で唄うもの」としかイメージしてなかったが、アカペラで「南部俵づみ唄」を唄ってみた。すると目の前の3人が突然涙を流したのだ。「繭子さんのこれまでの経験がもう歌になっているんですよね、私たちに輝いて生きてくださいって声が言っています」

私は目の前の涙と拍手に不思議な感

覚を覚えた。まさか私の唄なんかでこんな反響があるとは…。



●新たな転機！青森県民謡王座に！

3歳から始めた民謡だが、私にとって民謡人生は苦しいものだった。毎回、課題ばかりが降りかかり、本番では緊張で声が異常に掠れ、音程さえ取れなくなる。喉にロックがかかった状態になり唄はストップ。それがトラウマになりつつあった。大会本番では何回恥を書いたことか（ステージフライト）と診断される）

南部地区予選を九回通っても、決勝には届かずだった。妹の淳子は四年前に王座を取っていた。冬

に行われる大会が近づくにつれて、心の調子が狂い始めた。民謡嫌いなのに毎年チャレンジしている私。もう終わりにしようと思度思ったことか。しかし、懲りないもので「あと1回だけ出る」と父に話すと猛反対を受けた。「これ以上みんなをがっかりさせるのか、しょしつらし（恥ずかしいにも程がある）出るな」と。

そして決勝の二月。大会前日に控えたりハースル当日の朝、繭子の宿のお客様から1本のメッセージをいただいた。「私の好きな言葉に 君子に終わり有り『終わりの如くあらばその事成れり』と。有終の美をお飾りください。」

この言葉を目にして、ぱくっと目の前が一点の曇りもない澄み切った気持ちになったのを覚えている。これまで私は民謡に対して何を萎縮していたのだろう、有終の美を飾るには最高の舞台が私には用意されている。50年間分私と出会って関わってくれた方々に感謝して思いっきり唄えばいいだけじゃないか。

私は本番が楽しみにさえてなっていた。大会が楽しみだなんて初めての経験だった。

そして、私は何の心配なく思いっきり唄い切った。過去から積み上げてきた自分自身に勝ち、「第69代青森県民謡王座」をいただいた。



妹は63代。姉妹で民謡王座は歴史上初。そして、「第31代青森県手踊り名人位」との2冠は、女性では史上初を成し遂げた。

△後日のエピソード▽

半年後に行われた祝賀会の時、父は挨拶で「今回は娘に教えられた。私が反対しても出ると言ってきた。しかし、繭子は王座を勝ち取った。人になんと言われようが、信念を曲げないことは大事だと親としても気付かされた」



●東京⇄青森 青森県民舞踊を広める活動を展開中

青森県民謡王座を獲得してからまる1年の月日が経つ。この1年はこれまでの50年以上に民謡が愛おしかった。小さい頃から知らず知らずに自分の魂に染み込んでいた南部民謡。そして、常に肉眼で見てきた師匠方の芸や両親の三味線と踊り。自分はいつの間にか民謡から離れられない人になっていた。

心と身体が自由自在に動ける今、西塚繭子を知ってもらって、子どもたちやこれまで民謡と無縁だった人にこそ、体験してもらいたい。私は南部手踊り、民謡体験会を月に一度、東京で実施するようになり2年

が経つ。一人ずつではあるが興味を持ってくださり、「繭子さんとやって元気でました。楽しかったです。」と続けてくださる方がいるというのが今の私の一番の喜びなのかもしれない。

日本の伝統、郷土の文化がこんなにも人を喜ばせる力があつたのかと、50年続けてきて53歳にしてようやく気付けたのは、遅かったのか早かったのか、でも・民謡の家に生まれて幸せなことだったのだなあ。

小学校の先生から民宿業。全く違う職種だが、共通していることは、私がのびのびと輝いているときは、目の前の人もそうなるし、互いが成長できること。教材は使わない人生になったが、諦めなければ夢は叶うこと、思いやりと尊敬と感謝で大切な人と繋がっていただけることを学んだ。

そしてお弟子さんの育成に励む。数ある民謡教室の中から、何かのご縁で私から習っている方々。また嬉しいことに、私が最後に受け持った子どもの妹さんも繭子の宿に習いに来ている。楽しかったと言って帰ってくれるこの喜びよ。

私なりの有終の美を飾り、第二の人生の晴れの門出に相応しいものになってまる一年。強運の星のもとに生まれたもんだな。

今後も好きな青森県民謡と南部手踊りでお客様や周りの人たちを喜ばせられるなら嬉しい。



この伝統を未来から見たときに、私たちがその途中の紡ぎの一つであれば幸せだ。そして、民謡の世界をまだ知らない令和の時代を生きる若者たち、世界の人たちに、「日本の民謡ってかつこいいよ、楽しいよ。」と伝えたい。そして一緒に唄って踊って自分たちの持つ真っ直ぐな輝きを一緒に放てたら嬉しい。

そして、4月生まれの妹西塚淳子と5月生まれの姉西塚繭子の民謡ユニット「青森うぐいす姉妹」。うぐいすの鳴く頃に生まれた私たちに父が命名したものの。民謡の生涯、「ホーホケッ・・・」声が続く限り、唄い続けるであろう。

子曰く、之を知る者は之を好むものに如かず。之を好む者は之を楽しむ者に如かず。

西塚繭子

26年間小学校教師 コロナ禍で突然退職 南部町で『繭子の宿』を経営。民謡、南部手踊り、津軽三味線教室。福祉施設訪問、各イベントに出演。月に一度は東京で妹と民謡、手踊り日本一が伝わる体験会を実施。

人は誰でも今から輝ける。

感動スルヒトデ、ワタシハアリタイ
芸能の継承と発展に力注ぐ

主な受賞歴

2001青森県手踊り名人位

2002南部七踊り全国大会優勝

2008青森県民謡民舞全国大会優勝

2024青森県民謡王座 他

女性史上初の二冠

